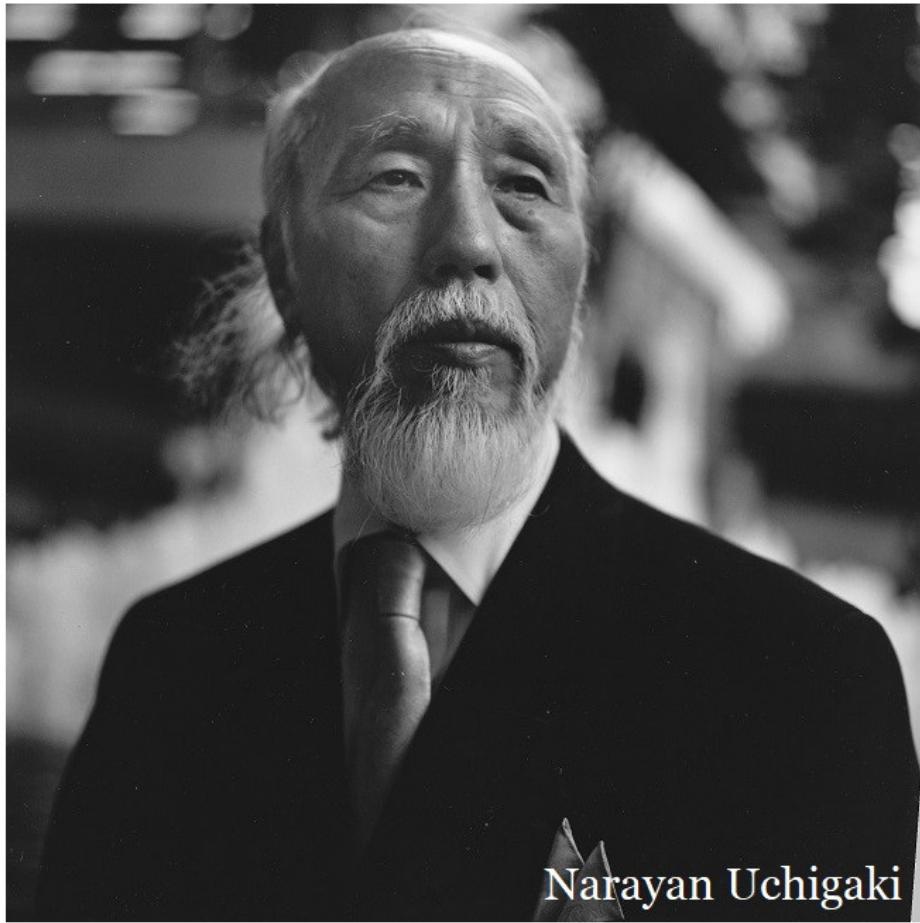


KALPATARU カルパタル

ナーラーヤン内垣 講話録 NO. 120

真実な響



Narayan Uchigaki

目次

目次	
目次	3
元々のバイブレーションへ	
1. 元々のバイブレーションへ	7
アジメールの賤民	
2. アジメールの賤民	11
自分の響を耳で聞け	
3. 自分の響を耳で聞け	17
クリシュナ神の気配	
4. クリシュナ神の気配	23
魂の底から歌う小学生	
5. 魂の底から歌う小学生	27
本当のインド	
6. 本当のインド	31
ナーラーヤン内垣	
ナーラーヤン内垣	35
奥付	
奥付	39

目次

目次

真実な響

1. 元々のバイブレーションへ
2. アジメールの賤民
3. 自分の響を耳で聞け
4. クリシュナ神の気配
5. 魂の底から歌う小学生
6. 本当のインド

ナーラーヤン内垣について

元々のバイブレーションへ

1. 元々のバイブレーションへ

今日は真実な響というお話をしましょう。人間は今本当のバイブレーション、真実な響を忘れてしまったんですね。なくしてしまいました。なぜかと言うと、経済とか、働かなければいけないとか、子供を学校へやってまた迎えに行くとか、小さい子供のある家では保育園に子供を預けるとか、もうともかく生きることに忙しいから、真実な響を失ってしまったんです。しかし人間に一番大切なものは真実な響です。まあ無論生きていかなければならないから、お金も必要だし衣服も必要です。必要だけれども、一番必要なのは真実な響です。あの人は賢いとか、美しいとか、いろいろそういういいものがあったても、一番必要なのは真実な響。どんな貧乏であっても、どんな仕事であっても、どんな人も真実な響を持たないといけないですねえ。例えば、偉い偉いアメリカの大統領であっても、また一般の我々であっても、真実な響が一番必要なんですね。

ところが現在の多くの人々は真実な響というものを忘れてしまったし、何が真実な響であるのかということもわからなくなってしまったんですね。自分たちが持っているこの肉体の波動、バイブレーションが騒々しいバイブレーションになったりと、汚れたバイブレーションになっているわけです。それを元のバイブレーションに戻さないといけないですね。しかし元のバイブレーションというのがどんなものかわからないから戻しようがありません。どこにその元のバイブレーションがあるのだろうかと思って探しても、なかなか見当たらない。表通りは車がウワツと走っているし、ポリスカーもブーブーブーと走っているし、オートバイもババーツと走っている。赤信号青信号が忙しく変わって、人間はその騒々しい中に、忙しくてやかましいガチャガチャした中に生きているから、どこを探しても本当の真実な響というのが見つからないわけですね。

アジメールの賤民

2. アジメールの賤民

私も長い間そういう本当の真実な響というのがわからずにきまして、三十八歳あたりに初めてインドへ行きました。それから四十一歳かにまたインドへ行ったりと、何回もインドへ行きましたが、いつも舞台がアジメールという所になるんです。そこはデリーとボンベイの中間よりも北の方で、回教徒のメッカなんです。回教徒の大きなお寺があって、回教徒がたくさんいるんです。第二次世界大戦の後にインドが独立しましたね。その時にヒンズー教徒と回教徒が分かれたんですね。回教徒は皆東パキスタンと西パキスタンに行きました。ところがそのアジメールの回教徒はおとなしい人が多くて、パキスタンへ行かずにアジメールに残った人々もたくさんあったわけです。そういうことで、アジメールは回教徒とヒンズー教徒が仲良く平和に暮らしている町なんです。

そしてその辺にはその辺特有の賤民と言うんですか、アウトカーストの人々がいるんです。アウトカーストの人々というのは、インド中にいるんですが、アジメールのあの辺り、ラジャスタン州と言うんですが、そこには特別な賤民階級の人々がいるんです。そういう人々の住んでいる部落へ行って、私はいろいろな文化活動をやっていました。日本とインドのカルチュラル・エクスチェンジ・センターをしていました。診療所をそこでしていたんですがね、その医科大学と話をして医科大学のお医者さんとインターンの女の子たちに来てもらいました。週に二回、村人の病人を集めて、診療して薬をあげるんです。病人はたくさんワンサワンサと来るんですけど、その週二回以外にも私や弟子が薬を持ってオートバイで村中を回っていました。村の家は石を組んで作ってあって、大雨が降ったらもう石が崩れたりするような家で、中に何があるのかと言うとね、木で組んだベッド二つと鍋一つか二つ、それからアルミのお皿が一つか二つ、それぐらいしかないんです。かわいそうですね。そういう人々の住んでいる所へ時々オートバイで薬をあげに行ったり、おできなんかに薬を塗ってあげに行ったりしていたわけです。

ある時、そうして行ったら、向こうの人が喜んでね、山羊や水牛や牛のお乳をくれるわけです。飲めと言って持って来てくれるんです。それでベッドへ腰を降ろして、牛乳を一杯飲んで立ったら、わずかに、三分の間にもう南京虫がいっぱいひっついてる。赤い小豆程の血を吸う虫があるでしょう。で、もうかゆくかゆくするんです。

そんな部落だからインドの普通の人々が入っていきません。カーストの低い人々が集まっている村なので、普通のインド人が入って行ったら怒られるんです。追い出されるんです。その村の人々の方は町へ買い物に行けるんですよ。で、いろいろな物をお金で買うんですが、映画館へ入ったらいけないんです。気の毒ですね。それで日本で集めたシャツとかパンツとかたくさん送ってね、その辺の子供たちを集めてあげるんです。すると子供たちや親たちが喜ぶでしょう。

で、終わりの方にはインド政府からミシンをもらってきて、仕事を教えました。日本語で言えば職業訓練所ですね。ミシンの使い方と洋服の縫い方を教えたわけです。そして教えてもらう村人はお給料がもらえるんです。アハハ...、反対ですね。インド政府から我々がもらったお金を習いに来る村の女の人たちに百ルピーあげるんです。インドで百ルピーといったらものすごく大きなお金なんです。お金をもらってそのうえ仕事も教えてもらえる。いいですね。まあそういうように政府地交渉して村人を喜ばせてあげていったわけです。ね、いいことしていただいでしょう、アハハ。

そうしていたら面白いことにね、あちらのお巡りさんやお金持ちがどうかと言うと、「あなたたちはインドに来て、一銭のお金にもならないのに、なぜそんなことをしているのか」と言うんですね。我々は奉仕で行っているのに、インドの人にはそれがわからない。お金ももらわずに人々のために働いて、そればかりでなく、自分の懐からお金を出してまで、なぜそんなことをするのかと思うんですね。

まあそういうような中でそんな仕事を続けていたんですけれども、また我々の方にはそういう部落から受ける何かいい恩恵というものがあつたわけです。何かいいものがもらえるわけですね。どういうものがもらえるかと言いますと、お金とか物とか野菜とかと違ってね、村人の持っているその心、美しいハート、真実なるバイブレーション、それを見てね自分たちが勉強していくわけです。村人の中には日本人が持っていない何かいいものがあるんです。

その村人というのは五百年昔にはトライバルだったんです。トライバルといって山の中をお猿さんみたいにね、弓と矢を持って動物をうち、生きていた人々だったんです。原始人ですね。家を持っておらず、農耕ということもせず、山から山へ山から山へと動物を弓矢で追って生きていました。アフリカにもオーストラリアにもブラジルの山奥にも裸でそういう人々がいますね。五百年昔はそんな人々だったんです。で、そういう人々が畑をつくることを覚えるんですね。それで今まであっちへ行ったりこっちへ行ったり山の中をウロウロしていたのが、定着と言うんですか、その土地にちっちゃな家をこしらえているようになったわけです。その当時の家と言ったらね、竹のようなものを組ん

で、そこへ直径五十センチ以上もあるような大きな葉っぱをペタペタペタペタ貼りつけるんです。雨も降らないから、それで充分なんです。で、その山奥へ行ったら、未だにそんな生活をしている人々がいました。まあそういう人々であったわけです。

自分の響を耳で聞け

3. 自分の響を耳で聞け

そこで、その村人の生活をじっくり見ていますとね、インドの大昔の大昔、私の言うリグ・ヴェーダ当時ありますね。その一万年程昔のリグ・ヴェーダ当時のお祭りの形式が残っているんです。その当時のサーマ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダのお祈りを未だにしているんです。大昔のことを変えずに、百年経っても二百年経っても三百年経っても千年経ってもね、同じことを続けているんです。そのお祈りを見た時、本当にもう大昔に戻ったような気分になりました。夜は真っ暗闇でしょう。明かりが全然ない。その真っ暗闇の中で、一か月に一遍か何か、村人がシヴァ神とかドゥルガ神のほこらのある所に集まってね、お祈りをして、そこで踊るんです。それがものすごくいいんです。真っ暗闇の中にランプをともして、その真ん中で一人が踊る。男の人が踊る場合もあるし、女の人が踊る場合もある。女の人が頭の上へ水壺を三つも載せて踊る時もあります。それを見てますとね、もうインドの大昔の大昔の大昔に戻ったような気持ちが起きてくるんです。その人たちは貧乏でしょう。貧乏で何も持っていない。そういう人々が昔から昔から昔から伝わっていることを素朴にと言うんですか、飾り気なくやっているわけですね。だからもうとっっても良かったです。

もう一つ今お話をしている思い浮かんだことを話しましょう。インドにホーリーという大きなお祭りがあります。それは春三月に「ああ、春になった、春になった」といって喜ぶお祭りで、アメリカのイースター復活祭で、春、これから畑を耕すのに神様の恩恵を受けて、にんじんやじゃがいもなど食べ物をたくさん作れるとあって喜ぶでしょう。そんなふうなお祭りです。三月から始まるんですが、三月になったらものすごく暑くなるんです。朝の十時になったらもう表を歩けないんです。朝の十時から夕方六時まで動けない。それで皆家の中でじっと寝てるんですが、十時から六時まで寝るといったら大変です。しんどいです。だから四時頃になったらウロウロと起きてきて、お茶でも飲むんですがやはり暑いので、また六時までおとなしくしているわけです。それ程暑いんです。インドの三月になったら一遍に暑くなってきます。そのときにホーリーというお祭りがあるわけです。

このお祭りは田舎のその村人のいるところでもやるんです。夜になったら、あちらの部落こちらの部落で太鼓を打ってね、ドンドンドンドンドンドン。ずーっともう真っ暗がりでしょう。音だけしかないんです。あっちでもドンドンとお祭りをしている

な。ずーとあっちでもドンドン音がしているな。お祭りを始めるな。こちらの村でもお祭りをしている。ドンドンドンドンドンドン鳴って。で、自分たちの部落のお祭りに行くと、広場にお米の藁や麦の藁がいっぱい積んであるんです。そしてその藁の真ん中に高い高い棒が立っているんです。そして真っ暗がりの中、藁に火をつける。すると藁は乾いているので、火がブワッと燃えるんです。その回りには村の男の人たちがいっぱい集まっています。さらにその回りには女の人たちがいっぱい集まって、手を打って歌を歌っているんですね、火に顔が照らされてね。で、男の人たちはどうするのかというと、火の中へ飛び込んで、その棒をつかみに行くんです。上がって行って、その棒の一番てっぺんをつかんだ者が勝ちなんです。火の中へ入っていくのだから熱いです。勇ましい行事ですね、ものすごくいいです。

その時その村の長老が私の横にいて、歌を歌っていたんです。長老といたら一番年のいった偉い人です。大体八十歳かそこいらの人です。その長老が歌を歌う時の動作がものすごく印象的なんです。自分の耳のところに手をもっていくんです。耳の遠いおじいさんがよく手を耳のところにもっていくでしょう。そういうふうにな、その長老が自分で歌いながら自分の声を聞くんです、自分の声を耳に手を当てて聞くわけです。これを見た時、本当になんと言うんですか、感動したと言うか、ハッと思いましたねえ。そしてなぜそんなことをしているのかなぁと思いました。

で、インドの文献を読んだりしてインドのことを勉強していてわかったのですが、＜響を耳で聞け＞という言葉がインドの教えの中にあるんです。自分のお腹の中にあるとっていいの、自分の持っている体全体の、肉体も心も精神も全てがもっている響、その響を聞けというわけです。響がインドの教えの中心になっているんです。まあそういうようなことで、その長老が歌を歌いながら、自分の全身からまとめられて出てくる声を聞く。例えばいやらしい人間だったら、いやらしい歌とか声しか出ないでしょう。そのように自分というものが透明できれいだったら、きれいな声、バイブレーションが出るわけです。それを自分でもう一遍聞きなおすわけです。まあそういうインドの古い古い昔のしきたりと言うんですか、素朴な本当の真実なやり方があるわけです。原始的と言うんですか、大昔的ですね、昔、昔、昔の昔のような響が自分たちの中にも伝わってくるわけです。そういうのを見えていますといいですねえ。

どこの国でも長老っていいと思うんです。長老といたら、もう年もいった、その部落で一番偉い人格のある人、皆から尊敬されている人ですね。これはもうソビエトへ行ってもそうだし、アメリカへ行ってもいい、どこの田舎へ行ってもいい、どの町へ行ってもいい、日本でもブラジルでも、そういう長老というような人ね、皆立派だと思えます。皆立派な響をもっていると思います。

クリシュナ神の気配

4. クリシュナ神の気配

また響に關したお話ですが、インドで私が住んでいた建物にいるサーバントの息子が、まだ十歳ぐらいなんです、お父さんの麦畑に案内しますと言うので、ついて行ったんです。サーバントでも土地をたくさん持っているんです。アウトカーストの人でもね、大昔からそこに住んでいるから土地をたくさんもっているわけです。そこに麦を植えているんです。で、ずーっとずーっとずーっとあっちの、だいぶ遠い所まで歩いて行ったら、一面の麦畑です。ちょうど麦の穂が実って、ザーッと見渡す限り麦、金色の麦の波のうねりです。ウワーッとね、麦畑、麦畑、麦畑。そこに一本のマンゴーの木がありましてね、その木に腰を降ろして息子が持ってきたスイカを食べながら、その辺の空気を味わっていたんです。見ても見ても見ても、遠く遠く遠くまで、見渡す限りの麦畑、金色の穂先が波打っています。なんて言ったらいいのか、その辺り一面の空気がとってもいいんです、静かでね。その辺は今言ったような真実なバイブレーションを持った田舎の人々が住んでいる地域ですから、地域そのものにもまた真実なバイブレーションがあるんですね。人間にそういう真実なバイブレーションがあるように、その地域にも真実な響が漂っているんです。ものすごく気持がいいんです。そしてその時ね、インドの神様のクリシュナってありますね、そのクリシュナが笛を吹いて現われてくるような、そんな空気が感じられたんです。ついその辺にクリシュナが現われてきているように思うんです。気配がするんです。そんなバイブレーションが近づいてくるわけです。すごいものですねえ。だからそれを反対に言えば、悪い人間がいたらその辺りの空気まで悪い。まあ例えばシカゴとかニューヨークとか、またはダウントウンの裏道を歩いても恐ろしいですねえ、怖い空気が漂っているでしょう。で、その時に、神クリシュナっていったんだなあと思いました。やっぱりそこは神クリシュナが現われてくるような、そういうバイブレーションなんですね。本当のバイブレーション、真実な響があるんです。

私の書いた詩にね、我々が忘れてきた一本の笛というのがあります。その笛というのは真実な響が出るわけですね。その笛を自分たちがどこかに置き忘れてしまったんです。昔、草笛と言うんですか、草をちぎって笛を作ったりしたですね。ああいうのはいいものです。

インドへ行きますとね、牛飼いの子供たちが、笛を吹きながら山羊とか水牛とか牛などたくさん引っ張っていくんです。引っ張っていくのに笛を持っています。ピリピリピリ

ピリピリピリ鳴るね、その笛がとってもいいんです。それで子供たちがそれを吹いていると、もうその笛が欲しくてしょうがない。で、その笛を一遍見せて欲しいと言って見るでしょう。そうしたらお土産に売っているような安物の笛と同じなんです。ああ、こんなのかと思って、お土産に売っているような安物の笛を買うわけです。そして笛を吹くんだけど、インドの子供たちが吹いているような音色が出ないんです。なんだ、やっぱり子供たちの吹いている笛とお土産の笛は違うんだなあ、そう思うんですけども、結局どうも同じらしいんです。皆同じ、アハハ……。で、皆お土産の安物の笛買って、日本に持って帰るんだけど、吹いてもいい音色が出ない。それは細い竹にただ穴があいているだけの、つまらない笛なんです。だからいくらうまくその笛を操っても、いい音色が出ない。その同じ笛なのにね。インドの子供の持っている笛はものすごい宝物みたいになるんです。きたない子供で、靴も履いているか履いていないかわからないような、ズボンでもシャツでも方々破れているような、いつお風呂に入ったかわからないような子供なんです。そんな子供が牛を追いながら、山羊を追いながら、吹いている笛の音がものすごくきれいなんです。そんな賤民、アウトカーストで町に行っても映画館へ入れてくれないような、しいたげられた子供が吹く笛の音から、もう真実なる響が流れてくるんです。それは何が流れてくるかと言うと、自分の心ですね。体全体から出てくるんでしょうね。

長老が歌を歌いながら自分の歌の響をね、耳に手を当てて聞く、聞きながら歌う、そういうインドの伝統、大昔からある伝統。それはもう町中には、あるいはお金持ちの家には、あるいは立派な着物を着たお坊さんには、あるいは大きな殿堂で押し合いへし合いしている信者とかお坊さんたちの中にはないんです。そういう響というのはお金とか名誉心とか商売が繁盛しているとか、そういうものの中にはないですねえ。そういうことをインドで勉強させられるわけです。どうしたらあのような響が自分たちの中に出てくるんだろうかということを勉強するんですね。そういう恩恵というか特典があるから、奉仕活動を一生懸命にやれるんです。暑い所でも辛抱してやれるわけです。そしていつまでもそんな所にいることができたんです。我々が忘れてきた一本の笛、これをまた我々は見つけないといけませんね。

魂の底から歌う小学生

5. 魂の底から歌う小学生

これは東インドのカルカッタでのことですが、ラーマクリシュナ・ミッションが小学校も中学校も高校も大学もあるような学校を経営しているんです。我々はその小学校へ生徒たちが劇をする前日に行ったんです。子供たちは皆で稽古をしていたんですが、私たちはちょうど子供たちが歌を歌っているところへ入って行きました。そこで私はその歌を聞いてもう震い上がってしまったんです。ずーっと震ってくるんです。その子供の歌う歌、その声の中に魂の底からの真実なバイブレーションがあるんですね。小学校の劇で歌う歌、そんな歌を歌っているのにね、その子供のバイブレーションが私たちの魂を揺さぶってしまうんです。上手とかきれいな声とか、そんなものと違うんですね。美しいとかきれいという世界と違うんです。もう魂が震っているんです。それを聞いたらまたこちらもね、魂が震ってくるんです。その時、私の両手がピンとなってしまっただけ、もう突っ立っているみたいになりました。そして自分を忘れたみたいな状態になり、ずーっともう震ってしまいました。信仰厚い信仰厚い信仰厚い人が歌っている歌と違って、ただの小さな子供でしょう。十歳程の小学生なのに、魂の震うような震わせるような声が出せるんですね、すごいですねえ。それはやはりその親からまたその親からまたその親からまたその親から、ずーっと伝わってきたバイブレーションでしょうね。そうすると今親の立場にある我々は、いいバイブレーションを持っていないわけですね。

本当のインド

6. 本当のインド

今日のお話をまとめてみますと、インドの教えの中心は響ということで、立派な教えとかお説教とか経典の良いお話とかということが中心ではないということです。大昔から大昔から大昔から地の底に、あるいは空気の底に染み込んでいるバイブレーション、真実なバイブレーションがインドという国をこしらえているんだと思いますね。どんな雄弁なお説教よりも、その地の奥に空気の奥に流れている、あるいは一般民衆の声のバイブレーションの中に流れている真実なるもの、それをつかむことがインドに行くに当たって一番大切なことだと思います。また同時にインド人そのものが、それを知らないといけないと思いますね。インドのお坊さんといったら、口がものすごく達者です。ペラペラペラーッと喋って人を感動させてね、そんなお坊さんが偉いお坊さんになっているんです。インド人はもう記憶力がよくてね、何年何月何日何分、どこどこであなたと会いましたね、こう言います。そんなことばかり一生懸命に覚えるんですね。頭の中に詰め込むんです。で、お説教をする時でも、あの本読んでこの本読んであの本読んでこの本・・・それを皆集めてお説教をブワーッとしている。あの本にはこういうことが書いてあった、どういう人の書いたこういう本にはこういうことが書いてあったと言って、ペラペラペラーッと三時間でも四時間でも喋ります。そんなお坊さんが偉いお坊さんだといわれていますが、そんな人は偉いお坊さんと全然違いますね。お説教がいいということがいいのと違って、本当にわけのわからない、空気の中にあるインドの大昔からの真実な響、これこそ本当のインドですね。我々がそれを知らないといけないように、インドの人々もそれを知らないといけないと思いますね。そうしないと、インドというのは立ち上がることができないと思います。立ち上がるどころか、それを忘れたらインドはもう今の経済の波にあおられてブワーッとインド人全体が経済界の荒い渦に飲み込まれていくと思いますね。

当ソサイティの三十周年記念ツアーで、芝川君というのが十人程の人を引っぱってインドへ行きました。彼は何度もインドへ行っているんですが、今度インドへ行ってもうゲツソリしたと言うんです。どうしてかというと、カルカッタ駅に行ったらカラーテレビがあって、ディズニランドが映っていたというんですね。それでも嫌になってきたというんです。インドはインドでいいんですねえ。それがインドの駅にカラーテレビがあった、カラーテレビがあることは悪くはないですけどね。アメリカでもディズニランドのことがビャーッと映っていた、そのようにインドも段々段々段々変わってくるんですね。町では一年おきに、村でも五年おきに変わっていく。五年経ったら村がビャーッ

とひっくりかえってしまっている。町は一年経ったらもう変わっている。インドの中が段々賑やかになってきて、日本みたいになってきていますね。新しくなって行って、そのたんに今言っている真実なる響がどこかへいつているんだと思いますね。なくなっていつているんだと思います。

そこで、我々は今人類全体が失っていつている真実なる響を見つけたのだから、これをもう一遍自分のものとしなければいけないし、また人類のものともしないと、人類全体が滅びますね。人類全体が悲しみの中に入ってしまう。派手やかな宗教、お説教ばかりの宗教、経典ばかりの宗教をするような人間、または本ばかりを読むような頭でっかちな人間になってしまいますね。人間全体がもう違う人間になってしまいます。だから、我々は真実なる響というものを人々に教えていかないといけないですね。

ナーラーヤン内垣

ナーラーヤン内垣

<http://vedanta.sub.jp/>（ナーラーヤン内垣公式サイト）

ナーラーヤン内垣は哲学・宗教・神話学の研究者であり詩人である。大阪高槻市に本拠を置き、アメリカのカリフォルニア州に2ヶ所の拠点を持つ。インドにおいては、6ヶ所の文化交流センターを設置。医療活動と職業訓練活動を行う。バングラデッシュでは、戦災孤児と戦災未亡人のための母子寮を設立。教育、衣食住を与える。アメリカでは哲学者の記念式典などを行う。哲学・神話学を通し、文化・人種・宗教を超えて社会秩序の維持の必要性を説く。

A w a r d

1995 年日本文化振興会より、社会文化功労賞を受賞

1997 年ケンジントン大学より哲学博士号を授与される

1998 年国際アカデミー教育より Fellow のタイトルを授与される

1998 年 国連ユニセフとユネスコより世界平和賞を受賞

2007 年 アメリカ大統領より大統領最優秀賞 金賞を受賞

プロフィール

1924 年、和歌山市の金光教の教会で生まれる。28 歳のころ、ラーマクリシュナのヒンズー思想に出会う。その時生まれた詩情あふれる名著「仏陀再誕」の出版をきっかけに、日本における実践ヴェーダ運動の創始者としての活動が始まる。

1957 年、ラーマクリシュナ・ヴィーヴェーカーナンダ学園（日本ヴェーダソサイティの前身）を創立し終身会長となる。生涯を「人類はどうしたら救われるか」の探求と実践に捧げ、世界を舞台に活躍する。

バングラデッシュでは、戦災孤児と戦災未亡人のための約百人収容できる母子寮を設立し衣食住と教育を与える。インドにおいては、7年間に渡り6箇所の文化交流センターを設置し、賤民部落において、奉仕による医療活動と、職業訓練活動を行う。

インド滞在中の1974年、宇宙的存在との合一を体験する。この時編み出された光速瞑想は、宇宙合一の方法として大変ユニークなものである。その後思想の展開は「神話実現」に向けて、人間の真実への比類のない迫りを見せている。

アメリカでは、広い荒地を少数の弟子とともに、自らがつるはしをふって開墾し、美しい日本庭園を創りながら、著作活動、その他文化交流に励んでいる。アメリカカリフォルニア在。

2012年8月逝去。

著書17冊（英訳本も有）

奥付

奥付

カルパタル No. 120 「真実な響」(1988年1月17日)

著者：ナーラーヤン内垣

著者プロフィール：

感想はこちらのコメントへ

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

カルパタル No.1 2 0 「真実な響」

著 ナーラーヤン内垣

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
